

バテ・シェバ

2 回シリーズ

聖書箇所

Ⅱサムエル 11 章～12 章 25 節

マタイ1章 16 節

バテ・シェバとハギテ

I 列王記 1 章～2 章(特に 1 章 11 節～31 節、2 章13～25 節まで)

バテ・シェバ第一回

聖書箇所

Ⅱサムエル 11 章～12 章 25 節

マタイ1章 6 節

(参考)詩篇 51 篇

Ⅱサムエル 11 章の背景

ダビデはイスラエルを統一しエルサレムで油注がれ王となり、神様からダビデの家が永久に王位につくとの約束をいただいた。周囲の国々を従わせるようになり、アモン人との戦いの際も、アモン人を助けようとしたシリヤ軍(アラム)も懲りて、アモン人を助けるのをやめる程であった。しかし、依然としてアモン人はダビデに立ち向かい徹底抗戦の構えに出た。

Ⅱサム

バテ・シェバとの出会いの背景

11:1 年が改まり、王たちが出陣するころ、ダビデは、ヨアブと自分の家来たちとイスラエルの全軍とを戦いに出した。彼らはアモン人を滅ぼし、ラバを包囲した。しかしダビデはエルサレムにとどまっていた。

「年が改まり、王たちが出陣するころ」出陣する時期があった。昔の戦争は今とは違い、雨季や冬場など戦いに適さない時には、戦いをしなかった(休戦した)。

「ダビデは、ヨアブと自分の家来たちとイスラエルの全軍とを戦いに出した。」ヨアブはダビデの将軍。そもそも他の王たちは出陣するころにダビデは出陣していない。イスラエルの全軍が出陣しているのに、王が戦いに行っていない。

ラバはアモン人の首都で、いまのアンマン。将軍ヨアブ率いるイスラエル全軍は、アモン人と戦い、勝利し、残党がラバで籠城していた。

バテ・シェバ登場

11:2-4

11:2 ある夕暮れ時、ダビデは床から起き上がり、王宮の屋上を歩いていると、ひとりの女が、からだを洗っているのが屋上から見えた。その女は非常に美しかった。

「ある夕暮れ時、ダビデは床から起き上がり」、戦いに出ていなければいけない時に、ダビデは戦場にもいかず、軍事を部下にまかせっきりで、平和な都でのんびり。夕方まで寝ていたって・・・生活が思いっきり乱れている。何夜更かししているの？それとも、なぜ昼寝などしているの？

「王宮の屋上を歩いていると」起きたと思ったら、ダビデはお散歩。周辺諸国をみな従え、残るはアモンということで、緊張感がまるでなし。そういう時には霊的なガードさえも、落ちているようだ。「ひとりの女が、からだを洗っているのが屋上から見えた。」のんびりしている時の、突然の誘惑。この時、ダビデはすぐに目をそらせることもできたはずだが、そうはしなかった。「その女は非常に美しかった。」じっくり見てしまった。しかも非常に美しかったと。

ここで、いくら自分の家でも、お外で行水はないんじゃないかと思う。4 節では、「その女は月のものの汚れをきよめていた」って、書かれている。もそっと恥じらいがってもいいんじゃないかと思うのですが。

11:3 ダビデは人をやって、その女について調べたところ、「あれはヘテ人ウリヤの妻で、エリアムの娘バテ・シェバではありませんか」との報告を受けた。

戦いに行かず、王様の仕事をさぼり気味。だから夜更かしして、あるいはお昼寝して、夕方に起きてしまった。気晴らしに散歩した。たまたま体を洗っている女を見てしまった。しかも、美しい女だった。さて、ここまでは百歩譲って、しょうがないよねと思えるが、次にダビデのしたことは、弁解の余地がない。「人をやって、その女について調べたところ、「あれはヘテ人ウリヤの妻で、エリアムの娘バテ・シェバではありませんか」との報告を受けた。」わざわざ誰なのか調べさせて、人妻である報告まで受けている。完全に確信犯だ。

ヘテ人は、遡るとアブラハムが墓地を買った相手。エサウの妻はヘテ人だった。神の約束の地に住んでいた異邦人で聖絶の対象。ヘテ人アヒメレク(Ⅰサムエル26:6)とあるので、ダビデが逃亡生活をしていた時に、戦士としてヘテ人を迎えたようだ。神は、異邦人とて、イスラエルの神に従う者たちを仲間に受け入れてくださる。ウリヤは忠実なダビデの僕、勇士だった。

「ヘテ人ウリヤ」(Ⅱサムエル記23:39)ダビデの30人の勇士の中の一人。

「エリアム」「ギロ人アヒトフェルの子エリアム」(Ⅱサムエル記23:34)「ギロ人アヒトフェル」とは、「アブシャロムは、いけにえをささげている間に、人をやって、ダビデの議官をしているギロ人アヒトフェルを、彼の町ギロから呼び寄せた。この謀反は根強く、アブシャロムにくみする民が多くなった。(Ⅱサムエル15:12)」「ギロ」はユダ族の所有地となった場所。(ヨシュア15:51)

11:4 ダビデは使いの者をやって、その女を召し入れた。女が彼のところに来たので、彼はその女と寝た。——その女は月のものの汚れをきよめていた——それから女は

自分の家へ帰った。ダビデは、後に謀反を起こす自分の息子のアブシャロムの議官となるアヒツェルの息子のエリアムの娘に手を出すこととなる。人間関係が複雑だなあ。恨みを買いきり。優秀な部下の妻との不倫。人妻を呼び寄せたことに家臣は気づいていなかったのか、黙認したのか。いずれにしても主君をおいさめする忠臣はいなかったか、出払っていたらしい。聡明な夫人のアビガイルはどこ？ 夫の不倫まで気づかなかったか。

バテ・シェバものこのこついで行って、しかもことに及ぶとは…。お断りできなかったのだろうか？ バテ・シェバは信仰者だったのか？ さっきの、お外の行水もそうだし、アビガイルみたいな賢い言葉で巧みにかわすことができない女。美人なだけじゃどうにもならないね。しかし、この結果がないと、ソロモンが生まれないんだけど。

### 不倫の結果

11:5 女はみごもったので、ダビデに人をやって、告げて言った。「私はみごもりました。」聖書はバテ・シェバのことをウリヤの妻と呼び続けていたがここではとうとう「女」と呼んでいる。

### ダビデの隠ぺい工作

11:6-25

11:6 ダビデはヨアブのところへ人をやって、「ヘテ人ウリヤを私のところに送れ」と言わせた。それでヨアブはウリヤをダビデのところへ送った。

先ずは、自分の將軍のヨアブにバテ・シェバの夫を自分の所へ送るように命令する。「ヘテ人ウリヤ」と呼ばれているが、ウリヤが異邦人であることを意識しているのだろうか。

11:7 ウリヤが彼のところへ入って来ると、ダビデは、ヨアブは無事であるか、兵士たちも変わりないか、戦いもうまくいっているか、と尋ねた。

ダビデはウリヤに表向き、戦況報告をさせている。

11:8 それからダビデはウリヤに言った。「家に帰って、あなたの足を洗いなさい。」ウリヤが王宮から出て行くと、王からの贈り物が彼のあとに続いた。

「家に帰って、あなたの足を洗いなさい。」上手にウリヤを家に帰らせて、バテ・シェバと夫婦関係を持たせて、うやむやにしようとダビデはウリヤを誘導しようとする。

「ウリヤが王宮から出て行くと、王からの贈り物が彼のあとに続いた。」ダビデはウリヤに破格の待遇。ウリヤは何か変だなと感じたのだろうか？

11:9 しかしウリヤは、王宮の門のあたりで、自分の主君の家来たちみなといっしょに眠り、自分の家には帰らなかった。

11 節にウリヤの行動の理由が書かれている。ダビデの思惑通りにはいかない。ウリヤは勇士の一人として名が挙げられている程だから、ちゃらちゃらした行動をとる人ではなかった。ダビデは当てが外れてしまう。

11:10 ダビデは、ウリヤが自分の家には帰らなかった、という知らせを聞いて、ウリヤに言った。「あなたは遠征して来たのではないか。なぜ、自分の家に帰らなかったのか。」

11:11 ウリヤはダビデに言った。「神の箱も、イスラエルも、ユダも仮庵に住み、私の主人ヨアブも、私の主人の家来たちも戦場で野営しています。それなのに、私だけが家に帰り、飲み食いして、妻と寝ることができましようか。あなたの前に、あなたのたましいの前に誓います。私は決してそのようなことをいたしません。」

ウリヤが神を信じ、上司にもダビデ王にも忠実であることが分かる答えだ。ここで、皮肉なのは、異邦人のウリヤの方が、神の民であるイスラエル人のダビデよりも、靈的には強い立場にいる。勇士の一人とは言え、ウリヤはイスラエル軍の一兵卒にすぎない。一方ダビデは、一国の王。靈的優位に貴賤の別なし。ダビデはひそかに何とかウリヤを家に帰らせようと手を尽くすが・・・

11:12 ダビデはウリヤに言った。「では、きょうもここにとどまるがよい。あすになったらあなたを送り出そう。」それでウリヤはその日と翌日エルサレムにとどまることになった。

11:13 ダビデは彼を招いて、自分の前で食べたり飲んだりさせ、彼を酔わせた。夕方、ウリヤは出て行って、自分の主君の家来たちといっしょに自分の寝床で寝た。そして自分の家には行かなかった。

ダビデの努力も甲斐なく、ウリヤは家には帰らなかった。そこで、ダビデは別の手に出る。

11:14 朝になって、ダビデはヨアブに手紙を書き、ウリヤに持たせた。

11:15 その手紙にはこう書かれてあった。「ウリヤを激戦の真っ正面に出し、彼を残してあなたがたは退き、彼が打たれて死ぬようにせよ。」

ダビデは、自分の將軍ヨアブに自分の部下ウリヤを殺すように命令する。しかもその親書を殺されようとしているウリヤ自身が運ぶという皮肉なことになる。

このような殺人に近い命令を將軍ヨアブはやってのけてしまう。ヨアブはいみじくも自分の部下。しかも、有能な部下。そのヨアブをいくら王の命令だと言っても、あっさり従って殺してしまうところなど、ヨアブの信仰も怪しそう。

11:16 ヨアブは町を見張っていたので、その町の力ある者たちがいると知っていた場所に、ウリヤを配置した。

11:17 その町の者が出て来てヨアブと戦ったとき、民のうちダビデの家来たちが倒れ、ヘテ人ウリヤも戦死した。

ダビデの命令に従い、実行した結果報告を伝えるヨアブ。ダビデの陰謀を知りつつヨアブがそれを実行したことが分かる。將軍で軍事の専門家なのにあっさり言うことを聞いているのは腑に落ちない。お諫めするのが筋ではないか？ダビデの弱みを握っておいて、後で利用するつもりだったのだろうか？

11:18 そこでヨアブは、使いを送って戦いの一部始終をダビデに報告するとき、

11:19 使者に命じて言った。「戦いの一部始終を王に報告し終わったとき、

11:20 もし王が怒りを発して、おまえに『なぜ、あなたがたはそんなに町に近づいて戦ったのか。城壁の上から彼らが射かけてくるのを知らなかったのか。』

11:21 エルベシエテの子アビメレクを打ち殺したのはだれであったか。ひとりの女が城壁の上からひき臼の上石を投げつけて、テベツで彼を殺したのではなかったか。なぜ、そんなに城壁に近づいたのか』と言われたら、『あなたの家来、ヘテ人ウリヤも死にました』と言いなさい。」

士師記 9 章に出てくるギデオンの息子アビメレクがどのように殺されたのかの話をし、籠城している敵に近づきすぎるといけないのに、王様の命令に従ったから、こんなことになってしまった、でも命令通りにヘテ人ウリヤも死んだよと伝えさせていたヨアブがダビデの企みに気づかなかったはずはない気がするのだが。

11:22 こうして使者は出かけ、ダビデのところに来て、ヨアブの伝言をすべて伝えた。

11:23 使者はダビデに言った。「敵は私たちより優勢で、私たちに向かって野に出て来ましたが、私たちは門の入口まで彼らを攻めて行きました。」

11:24 すると城壁の上から射手たちが、あなたの家来たちに矢を射かけ、王の家来たちが死に、あなたの家来、ヘテ人ウリヤも死にました。」

11:25 ダビデは使者に言った。「あなたはヨアブにこう言わなければならない。『このことで心配するな。剣はこちらの者も、あちらの者も滅ぼすものだ。あなたは町をいっそう激しく攻撃して、それを全滅せよ。』あなたは、彼を力づけなさい。」

ヨアブの心配は、まったく必要のない展開に。ダビデは、自分の軍隊が大損害をうけたことについて、自分の命令のせいでもなく、ヨアブにもおとがめをせず、きれいにまとめてしまった。

→ かつてサウルがダビデに対して行なったように(ペリシテ人と戦わせて、彼らによって死んでもらおう)と画策したように、ダビデも同じ罪を犯した。人のふり見て我がふり直せばよかったのに。それができないのが、罪なのかも。

夫の死を聞かされたバテ・シェバ

11:26 ウリヤの妻は、夫ウリヤが死んだことを聞いて、夫のためにいたみ悲しんだ。バテ・シェバは自分の夫が死んだことを聞いて悲しんでいるのは、当然だが、自分がダビデ王の子どもを妊娠していることについては、どう思っていたのだろうか。ウリヤは自宅に帰ってもいないので、夫に詳しい事情を話すこともできずにいたのではなかろうか。しかし、ウリヤが家に帰っていたとしても、そんな話をする事ができたのだろうか？ 不倫の挙句、夫まで死んでしまい、それでバテ・シェバは「夫のためにいたみ悲しんだ」とか？

隠ぺい工作の成れの果て

11:27 喪が明けると、ダビデは人をやり、彼女を自分の家に迎え入れた。彼女は彼



の妻となり、男の子を産んだ。しかし、ダビデの行ったことは【主】のみこころをそこなった。

ダビデはあくまでも、きれいにまとめようとしている。喪が明けるまでまって、しかも未亡人の部下の奥さんを妻にしてしまうという慈悲深い行為をしているように見せかけている。しかし、アビガイルの時とは、動機が大違い。いくら隠ぺい工作をしても神の目は騙せない。神の御心を損なってしまったダビデ。

## Ⅱサム

神様によってダビデの罪が暴かれる

12:1－12:4 預言者ナタンは、たとえ話をする。

12:1 【主】がナタンをダビデのところに遣わされたので、彼はダビデのところに来て言った。「ある町にふたりの人がいました。ひとりには富んでいる人、ひとりには貧しい人でした。

12:2 富んでいる人には、非常に多くの羊と牛の群れがいますが、

12:3 貧しい人は、自分で買って来て育てた一頭の小さな雌の子羊のほかは、何も持っていませんでした。子羊は彼とその子どもたちといっしょに暮らし、彼と同じ食物を食べ、同じ杯から飲み、彼のふところでやすみ、まるで彼の娘のようでした。

12:4 あるとき、富んでいる人のところにひとりの旅人が来ました。彼は自分のところに来た旅人のために自分の羊や牛の群れから取って調理するのを惜しみ、貧しい人の雌の子羊を取り上げて、自分のところに来た人のために調理しました。」

喩え話を聞いたダビデの反応

12:5 すると、ダビデは、その男に対して激しい怒りを燃やし、ナタンに言った。「【主】は生きておられる。そんなことをした男は死刑だ。

12:6 その男は、あわれみの心もなく、そんなことをしたのだから、その雌の子羊を四倍にして償わなければならない。」

ダビデの隠ぺい工作を神が見ておられることに気づかなかったダビデは、自分の行いを表しているたとえ話の男に怒りをあらわにする。人のことは簡単に非難できるが、自分のことにはなかなか気づかぬ私たち。自分に罪があるからこそ、さらに罪への咎めも強くなる。

12:7 ナタンはダビデに言った。「あなたがその男です。イスラエルの神、【主】はこう仰せられる。『わたしはあなたに油をそそいで、イスラエルの王とし、サウルの手からあなたを救い出した。』

12:8 さらに、あなたの主人の家を与え、あなたの主人の妻たちをあなたのふところに渡し、イスラエルとユダの家も与えた。それでも少ないというのなら、わたしはあなたにもっと多くのものを増し加えたであろう。

12:9 それなのに、どうしてあなたは【主】のことばをさげすみ、わたしの目の前に悪

を行ったのか。あなたはヘテ人ウリヤを剣で打ち、その妻を自分の妻にした。あなたが彼をアモン人の剣で切り殺したのだ。

神様がダビデのしたことをどのように見ておられるかが書かれている。

12:7-8は神がどれほどダビデに恵みを施してこられたか、そしてこれからも御心にかなう生活をしているならたくさんの恵みを与えてくださったであろうことが書かれている。

ダビデが犯した姦淫の罪は、主のことばをさげすんだことによる。そして、その結果殺人の罪まで犯してしまった。神の目にはダビデ自身が手を下さずとも、ダビデが殺人をしたとみておられる。私たちが罪を犯す時、それは神のことばをさげすんでいる、大切に考えていない時だ。日々、みことばに触れ、神様のおっしゃることを大切にしておくことを忘れてはならない。

神様のダビデに対する罰の宣告

12:10-12

12:10 今や剣は、いつまでもあなたの家から離れない。あなたがわたしをさげすみ、ヘテ人ウリヤの妻を取り、自分の妻にしたからである。』

12:11 【主】はこう仰せられる。『聞け。わたしはあなたの家の中から、あなたの上になぞを引起こす。あなたの妻たちをあなたの目の前で取り上げ、あなたの友に与えよう。その人は、白昼公然と、あなたの妻たちと寝るようになる。』

12:12 あなたは隠れて、それをしたが、わたしはイスラエル全部の前で、太陽の前で、このことを行おう。』

神様は実際に罰を実行される。12:11-12については、自分の息子アブシャロムがそのようにする。しかも、散歩の時にバテ・シェバを見たあの屋上の上で。この時に自分の友アフイトフェルが裏切るようになる。

神の下される罰を聞いたダビデの反応

12:13 ダビデはナタンに言った。「私は【主】に対して罪を犯した。」ナタンはダビデに言った。「【主】もまた、あなたの罪を見過ごしてくださった。あなたは死なない。

ダビデは自分の罪を告白。これにより、主は罪を見過ごして下さり、ダビデ自身は死ぬことがないことが伝えられる。参考)詩篇 51 篇、32 篇

ここで、はっきりと聖書にダビデがバテ・シェバのもとに通ったのち、預言者ナタンがダビデのもとに来た時ダビデが書いた詩篇であると書かれている 51 篇 1 節から 17 節を見る。

< 51 > 指揮者のために。ダビデの賛歌。ダビデがバテ・シェバのもとに通ったのちに、預言者ナタンが彼のもとに来たとき

聖書の本文の前置きっぽく聞こえるので、読み飛ばしがちかもしれないけれど、実はこれも聖書の一部で、神のことばであり、神様が私たちに伝えたい大切なポイントが

入っている一例かも。

はっきりと詩篇 51 篇はダビデがバテ・シェバと姦淫の罪を犯した後、預言者ナタンが来て神のことばをダビデに伝えた時のものであることが分かる。しかも、ここで「**ダビデの賛歌**」と書かれている。このような状況にあってもダビデが神を褒めたたえることができている、そこはすごい。私たちにできるだろうか。詩篇 51 篇 1 節-17 節まで見る。

#### 51:1-2ダビデの願い

51:1 神よ。御恵みによって、私に情けをかけ、あなたの豊かなあわれみによって、私のそむきの罪をめぐい去ってください。

ダビデは自分に「**そむきの罪**」があることを認め、自分で罪を対処できないことを自覚し、神により頼んでいる。神の「**御恵み**」「**情け**」「**豊かなあわれみ**」を根拠としてお願いをしている。まずダビデは神との関係における罪への対処を図る。

51:2 どうか私の咎を、私から全く洗い去り、私の罪から、私をきよめてください。

次に、「**咎**」。今度は他の人(隣人)の領域を侵し、損害賠償をしなければいけないような罪を犯したことに対するダビデの対処。それを神に「**全く洗い去**」るように、お願いしている。そして、神との関係における罪からきよめてくださるよう神にお願いしている。

#### 51:3-5ダビデの自分の罪についての現状把握

51:3 まことに、私は自分のそむきの罪を知っています。私の罪は、いつも私の目の前にあります。

ダビデは自分に罪があることを認め、しかもいつも罪を犯してしまう危険性が自分の目前にあることを自覚していた。

51:4 私はあなたに、ただあなたに、罪を犯し、あなたの御目に悪であることを行いました。それゆえ、あなたが宣告される時、あなたは正しく、さばかれるとき、あなたはきよくあられます。

ダビデは誰に対して自分が罪を犯しているかを認識しており、それを裁く方が神であり、その神の裁きは正義の裁きであり、神が聖い神であられるので、その裁きに不正がないことも認識していた。

51:5 ああ、私は咎ある者として生まれ、罪ある者として母は私をみごもりました。

ダビデはアダムから受け継がれている罪が、自分の母が身ごもった時からあることを自覚し、生まれた時から咎があることも自覚していた。

#### 51:6-7再びダビデの神への願い

51:6 ああ、あなたは心のうちの真実を喜ばれます。それゆえ、私の心の奥に知恵を教えてください。

神が喜ばれる心のうちの真実を実践できるように、自分の心の奥に知恵を教えてくださいとお願いするダビデ。



51:7 ヒソプをもって私の罪を除いてきよめてください。そうすれば、私はきよくなりましょう。私を洗ってください。そうすれば、私は雪よりも白くなりましょう。

神の知恵をしっかりと学ぶには神様が自分の罪を除いて清めていただかないといけな  
いとダビデは思っていた。そうでないときよくなれない。参考)出エジプト12:22ヒソプ  
の一束を取って、鉢の中の血に浸し、その鉢の中の血をかもいと二本の門柱につけ  
なさい。朝まで、だれも家の戸口から外に出るはならない。過越しの祭りの時にヒソプ  
が使われているので、ここで、「ヒソプ」という言葉をダビデが使ったのは、つまり小羊  
なるキリストの犠牲の血によってのみ自分がきよくなれることをダビデは分かっていた  
のではないか。キリストの血潮の洗いによって、真っ白な雪より白くすることができる  
ことを確信していた。

51:8 私に、楽しみと喜びを、聞かせてください。そうすれば、あなたがお砕きになっ  
た骨が、喜ぶことでしょう。

罪を犯したことで、骨が砕かれてしまった、霊的に神と切り離され、霊的に砕かれてし  
まった状態であったが、キリストの血によって、神との関係が回復すれば、主にある交  
わりの楽しみと喜びをとりもどすことができるので、それをダビデはお願いしている。

51:9 御顔を私の罪から隠し、私の咎をことごとく、ぬぐい去ってください。

ダビデは神に自分の罪をないものとみなし、自分の咎を全てヒソプで拭い去ってくださ  
るように求めている。

51:10 神よ。私にきよい心を造り、ゆるがない霊を私のうちに新しくしてください。

51:11 私をあなたの御前から、投げ捨てず、あなたの聖霊を、私から取り去らない  
でください。

罪によって壊れてしまった霊的な神との関係を回復するために、神にきよい心づくり、  
罪の誘惑に動じることのない霊を新たに与えてくださるようお願いしている。

51:12 あなたの救いの喜びを、私に返し、喜んで仕える霊が、私をささえますように。  
罪からの救いの喜びが戻り、神に喜んでお仕えすることができる霊によって自分を支  
えていただきたいと言っている。

51:13-17 お願いを聞いていただいた時にダビデが何をするかも書かれているの  
で、請願の祈りに近い感じになっていく

51:13 私は、そむく者たちに、あなたの道を教えましょう。そうすれば、罪人は、あな  
たのもとに帰りましょう。

回復後のダビデは、罪人に神の道を教え、神への悔い改めを勧める働きをすることを  
約束。

51:14 神よ。私の救いの神よ。血の罪から私を救い出してください。そうすれば、私  
の舌は、あなたの義を、高らかに歌うでしょう。

救いの神による殺人の罪からの救いを得ることができるなら、神の義を高らかにほめ  
歌うことを約束。

51:15 主よ。私のくちびるを開いてください。そうすれば、私の口は、あなたの誉れを告げるでしょう。

そのようにすることができるようにしてもらいたい。神が交わりの回復をしてくださるのであれば、唇を開いてくださることになり、そうなれば神を褒めたたえますと約束。

51:16-17 神の望まれるいけにえ

51:16 たとい私がささげても、まことに、あなたはいけにえを喜ばれません。全焼のいけにえを、望まれません。

51:17 神へのいけにえは、砕かれた霊。砕かれた、悔いた心。神よ。あなたは、それをさげすまれません。

いけにえというと、とかく金品を神に捧げるイメージが強いかもしれないが、実は神が望んでおられるのは、神に対しての罪を認め、霊的に心砕かれ、悔い改めをすること、それを神が尊んでくださる。ちなみに第2版では、「砕かれた霊」は「砕かれたたましい」となっている。

私たちが神の前にダビデのように罪を言い表すことができるだろうか？ダビデのような告白をすることができるだろうか？悔い改めの心を持つことができるだろうか。

一方バテ・シェバって、悔い改めたのだろうか？一体彼女はこの姦淫の罪について、どう考えていたのだろうか？

参考)申命記22:23-27

22:23 ある人と婚約中の処女の女がおり、他の男が町で彼女を見かけて、これといっしょに寝た場合は、

22:24 あなたがたは、そのふたりをその町の門のところに連れ出し、石で彼らを打たなければならない。彼らは死ななければならない。これはその女が町の中におりながら叫ばなかったからであり、その男は隣人の妻をはずかしめたからである。あなたがたのうちから悪を除き去りなさい。

22:25 もし男が、野で、婚約中の女を見かけ、その女をつかまえて、これといっしょに寝た場合は、女と寝たその男だけが死ななければならない。

22:26 その女には何もしてはならない。その女には死刑に当たる罪はない。この場合は、ある人が隣人に襲いかかりいのちを奪ったのと同じである。

22:27 この男が野で彼女を見かけ、婚約中のその女が叫んだが、救う者がいなかったからである。

この聖書箇所は処女についてはあるが、既婚者でも叫ぶこと、あるいは拒むような言葉を使うことは出来たのではないか？しかし、聖書にはそのようなことをバテ・シェバが言ったとは一切書かれていない。王に言い寄られることが姦淫の罪にならないことはない気がするのだが。

12:14 しかし、あなたはこのことによって、【主】の敵に大いに悔りの心を起こさせた

ので、あなたに生まれる子は必ず死ぬ。」

しかし、神は子が死ぬという罰を下される。私たちが罪を犯すことは、サタンに対して大きな悔りの心を起こさせることと神は考えておられる。私たちが罪を犯すと、サタンは元気になって、さらに悪さをするのがわかる。

#### 神の罰が始まる

12:15 こうしてナタンは自分の家へ戻った。【主】は、ウリヤの妻がダビデに産んだ子を打たれたので、その子は病気になった。

12:16 ダビデはその子のために神に願い求め、断食をして、引きこもり、一晩中、地に伏していた。

12:17 彼の家の長老たちは彼のそばに立って、彼を地から起こそうとしたが、ダビデは起きようとせず、彼らとついでに食事を取ろうとしなかった。

神の憐れみを乞うダビデ。

12:18 七日目に子どもは死んだが、ダビデの家来たちは、その子が死んだことをダビデに告げるのを恐れた。「王はあの子が活着ている時、われわれが話しても、言うことを聞かなかった。どうしてあの子が死んだことを王に言えようか。王は何か悪い事をされるかもしれない」と彼らが思ったからである。

割礼をする前に取り去られたダビデの子。

#### 子どもの死を知ったダビデの反応

12:19 しかしダビデは、家来たちがひそひそ話し合っているのを見て、子どもが死んだことを悟った。それでダビデは家来たちに言った。「子どもは死んだのか。」彼らは言った。「なくなりました。」

家来たちはダビデに子どもが死んだことを伝えることを躊躇した。ダビデが自暴自棄になり何かおかしいことをすることを恐れた。(参考12:18「王は何か悪い事をされるかもしれない」と彼らが思ったからである。)

#### 実際のダビデの反応

12:20 するとダビデは地から起き上がり、からだを洗って身に油を塗り、着物を着替えて、【主】の宮に入り、礼拝をしてから、自分の家へ帰った。そして食事の用意をさせて、食事をとった。

主の裁きを受け入れ、すべてを神にゆだねた姿。罪のために切れていた神との交わりを取り戻すため、自分の身なりを整えて、神をまず礼拝し、そして断食をやめ、自分の生活を取り戻している。

12:21 すると家来たちが彼に言った。「あなたのなされたこのことは、いったいどういうことですか。お子さまが活着ておられる時は断食をして泣かれたのに、お子さまがなくなれると、起き上がり、食事をなさるとは。」

神とダビデの深い関係を知らない家来の反応は、ダビデの行動が不可解に映った。

12:22 ダビデは言った。「子どもがまだ生きている時に私が断食をして泣いたのは、もしかすると、【主】が私をあわれみ、子どもが生きるかもしれない、と思ったからだ。

12:23 しかし今、子どもは死んでしまった。私はなぜ、断食をしなければならないのか。あの子をもう一度、呼び戻せるであろうか。私はあの子のところに行くだろうが、あの子は私のところに戻っては来ない。」

ダビデは神の憐れみを乞ったが、それが受けられなかったとしても、神を恨むのではなく、神の判断に従い、自分を委ねる生活をしている。死んだ者は帰ってこない現実を受け入れ、かつ自分が子どもに会うことができる希望を持っている。

### その後

12:24 ダビデは妻バテ・シェバを慰め、彼女のところに入り、彼女と寝た。彼女が男の子を産んだとき、彼はその名をソロモンと名づけた。【主】はその子を愛されたので、

12:25 預言者ナタンを遣わして、【主】のために、その名をエディデヤと名づけさせた。ここで初めて、バテ・シェバは「妻バテ・シェバ」と呼ばれている。これは神の憐れみではなかろうか。妻となったバテ・シェバはダビデの世継ぎを生み、キリストの系図に名を残すこととなる。しかし、あくまでも「ヘテ人ウリヤの妻」として。主がソロモンにつけた名前は、エディデヤ、主に愛されたという意味。主との関係が回復し、神の愛を受けることができるようになった。親の罪と子どもは別扱いされている。

### マタ

1:6 エッサイにダビデ王が生まれた。ダビデに、ウリヤの妻によってソロモンが生まれ、ここでは「ウリヤの妻」と呼ばれている。系図上は厳しいね。やはり、御心を損なってしまった結果が残っている感じ。